

# *Frankenstein Or, The Modern Prometheus* を読む

菅 沼 慶 一

本稿は卒業生を対象とした第15回「英語教育研修部会」(1998,8,7)において“Romanticism ― 特に *Frankenstein* を中心に”と題して述べたものをほぼ全面的に改稿したものである。なお研修部会では1831年版を用いたが、改稿するにあたっては1818年の初版を用いた。

## (1) 物語成立の経緯とテキスト

作者はイギリス・ローマン派の詩人 Percy Bysshe Shelley (1792-1822) の二度目の妻 Mary Wollstonecraft Shelley (1797-1851) である。彼女は社会主義者、無神論者、自由主義者として知られた William Godwin を父とし、女権拡張論者であった Mary Wollstonecraft Godwin を母として生まれたが、母親はメアリを生み落として産褥で死亡した。

パーシィは19歳のとき、ロンドンの裕福な居酒屋の娘で16歳の Harriet Westbrook とスコットランドに駆け落ちして結婚しふたりの子供を儲けたが、ゴドウインの娘メアリと恋仲になって、1814年、一緒にヨーロッパ諸国を巡り、16年にハリエットがハイド・パークの Serpentine Pond で自殺すると、その6カ月のちにメアリと結婚した。このときメアリは19歳であった。彼女はすでに未婚のままパーシィの子供を宿していたが、この男の子は月足らずで生まれ、まもなく死亡した。結婚後、さらに3人の子供を儲けたが、最初のふたりは生後まもなく死亡し、メアリより生き延びたのは末の男の子 Percy (シェリと同名) のみである。以上の事実はゴトウインの影響による、パーシィの自由恋愛思想の結果に他ならない。

『フランケンシュタイン』は1818年に出版されたが、1823年と1831年にリブ

リントされている。この '31 年版はメアリが単独で修正を施した最終版であるが、メアリ自身による AUTHOR'S INTRODUCTION が付されていて、そのなかにこの作品が書かれるに到った経緯が述べられている。それによれば 1816 年の夏、シェリ夫妻 [まだふたりは正式に結婚していなかった] はスイスに出かけ、そのとき Byron 卿の隣に住んだ。たいへん雨の多い夏で外出もままならなかったから、パーシィ、メアリ、バイロン、ポリドリ [この人物は「頭が良く野心的ではあるが、風変わりな男」(a bright and ambitious but bizzare man) で、バイロンの旅行に付き添った医者であり、いくつかの怪奇物語を書いている]<sup>(1)</sup> の 4 人はドイツの怪談をフランス語に翻訳した書物を手に入れ、読み耽った。そして、各人が幽霊話、怪談を書こうということになった。そのとき、メア리를除く 3 人の間で語られた話にメアリは決定的なヒントを与えられた。それは (確実な証拠は存在しないのだが) Dr. Darwin の実験でガラスのケースに入れた一切れのヴァーミセリ (スパゲティの一種) が、なんらかの異常な方法によって生命を吹き込まれたというのである。このダーウインは、Steinberg によれば「進化論者チャールズ・ダーウインの祖父 Erasmus Darwin」とある<sup>(2)</sup>。また、この「イントロダクション」によれば、メアリは幼い頃から非常に空想癖が強く、さまざまな空想的物語を作っては友人に語り聞かせていたばかりでなく、ひとりで空想に耽ることがよくあったようである。

しかし、M. K. Joseph<sup>(3)</sup> はポリドリ医師の日記に基づいて「イントロダクション」の細部の事実の誤りを正した。それによって、生命の発生に関する議論はバイロンとポリドリの間で、主としてポリドリの主導で行なわれたこと、怪奇物語を書こうと約束したのはパーシィとバイロンとメアリの 3 人であったが、他のふたりは途中で投げ出してしまい、最後まで書き上げたのはメアリひとりであったこと、しかしバイロンの構想の一部はのちに彼の *Mazeppa* (1819) という、およそ 1000 行ほどの吸血鬼物語詩に活かされたこと、などが明らかにされている。

1700 年代から 1800 代にかけてはいわゆるロマン主義時代であって、シェリ、バイロン、コールリッジ、キーツらの活躍した時代であるが、これらの詩人た

ちはまま想像力を駆使して、超自然的な、奇怪な現象を扱い、幻想的な世界に美を描こうとした。それはロマン派の美学の実践である。「ゴシック小説」はそうした想像力を駆使することのできるひとつのジャンルとして流行を見たものであり、元来はゴシック様式建築の城や館を舞台とし、超自然的な出来ごとや冒険、恋愛を繰り広げた物語のことであるが、必ずしもゴシック建築にとらわれず、一連の怪奇小説を意味する。こうして Horace Walpole の『オトラント城』(*The Castle of Otranto*, 1769) から B. Stoker の『ドラキュラ』(*Dracula*, 1897) までの一連のゴシック小説が現れることになる。

『フランケンシュタイン』がパーシィの筆になる Preface (無署名) を付して出版されたのは 1818 年の 5 月であった。出版当時、批評家たちはパーシィの作品だと考えたようである。上述のようにこの作品はメアリが 19 歳のときに書き始められたものであるから、表現や構成などに未熟なものがあつたであろう。原稿の段階でパーシィがかなり手を入れたようで、彼自身が「(わたしは) たいへん若い作者の作品に必然的に生じる、雅致を欠いたいくつかの文章を直すことに大いに意を用いた」<sup>(4)</sup> と書いているし、Anne K. Mellor は「パーシィ・シェリは『フランケンシュタイン』の原稿にいくつかの小さな点で実際に改善を加えた。3つの事実の誤りを正し、いくつかの文法の誤りを削除し、ときどき本文の意味が明瞭になるように改め、メアリの生硬な言葉を精確な術語に代え、パラグラフの区切りを円滑にし、本文の主題の流れを豊かにした」<sup>(5)</sup> と述べ、およそ 1,000 カ所に修正に施し、その大部分をメアリは受け入れたと言っている。

メラーは原稿と '18 年版と '31 年版を比較していて '23 年版にはまったく触れていないが、これは '18 年版と '23 年版が同じものであることを意味するのであろうか。'18 年版と '31 年版との違いはかなり大きい。まず '18 年版は巻(volume)分けがしてあつて、Volume I (第 1 章～第 7 章)、Volume II (第 1 章～第 9 章)、Volume III (第 1 章～第 7 章) となっているが、'31 年版は巻分けがなく、全体が 24 章からなる。その他、登場人物の経歴、出来ごとの背景や経過、風景の描写などがかなり異なっている。全体的に見て '18 年版の方が記述が具体的であるが '31 年版のほうが詳細に渡っている部分もある。

メラーは『フランケンシュタイン』を教科書に用いる場合は'18年版のテキストを用いることを勧め、「なぜなら1818年版のテキストのみがフランケンシュタインの性格とメアリの政治的、道徳的イデオロギーに対する考え方を着実に、首尾一貫して表わしているからである」<sup>(6)</sup>と述べている。筆者もまた1818年版を用いることにしたい。

## (2) 物語の梗概

ヴィクター・フランケンシュタインはスイスの青年の名であり、彼の創り出した人間は名前を与えられることなく、最後まで怪物(monster)、悪魔(daemon, fiend)、被造物(creature)などと呼ばれている。筆者も以下「怪物」と呼ぶことにする。

-----

最初にイギリスの青年 Robert Walton による、この作品の導入部がある。彼は幼い頃から海洋に憧れていたが、船と船員を雇って北極に向かって船出する。その航海のあいだ、イギリスに住む姉の Mrs. Margaret Saville 宛ての手紙と日誌によって、自分の野心、航海での困苦を訴える。

ある日、氷の海に囲まれているあいだに、犬ソリに乗った巨人が氷海を走っていく姿を認める。やがて息も絶え絶えのイギリスの青年がソリに乗ってやってくる。この青年を船に拾い上げて手厚く看護するうちに、彼は次第に元気を回復して少し話せるようになり、彼がウォルトンが見た怪物を追っていることが明らかにされる。この若者は身の上話を語り、ウォルトンその一部始終を記録して姉に伝えようとするのであるが、終章において再び姉に宛てた手紙と日記によって、フランケンシュタインと怪物の最後の模様を記し、物語を終える。

(Vol.I) ヴィクターはジェネヴァの名門の出で、その家族は愛情深く、教育に熱心な両親、二人の弟 William と Earnest、父の妹が死亡し、その夫が再婚するために引き取るようになった従妹 Elizabeth Ravenza、近隣の娘で、移り気な母親につらく当たられていたために、家に住まわせることになった Justine

Moritz から構成されている。そしてエリザベスは単なる従妹以上のものとして位置づけられ、ふたりが将来結婚することは両親の望みでもある。ジャスティンはフランケンシュタイン家の召使であるが、単なる召使以上に優遇されている。

ヴィクターはジェネヴァのいろいろな学校に通ったが、あまり友人との交際を好まない性格で、心を許した友人は Henry Clerval のみである。父の勧めもあって、ヴィクターはドイツの Ingolstadt 大学に留学することになる。しかし出発の日が近づくとエリザベスが猩紅熱に侵され、母が必死に看護したお陰でエリザベスは助かるが、母は猩紅熱が感染して死亡する。[この情け深く愛情に富んだ母親とエリザベスとジャスティンの3人は、家庭と女性の役割の観点から、フェミニストの批評家によってしばしば論じられている。]

ヴィクターはインゴルシュタットでは自然哲学と化学の研究に専念し、かなりの知識を身に付けるが、2年後に帰郷しようとするとき突然、人間の体や生命を与えられた動物に関心を引かれるようになり、生命の原理がどこから発するのかを突き止めるには、死を知らなければならず、また、人体の崩壊と腐敗を観察しなければならない、と考え、教会の地下納体堂や納骨堂で夜を過ごすようになり、ついに生命体を創り出す能力を身に付けるようになる。こうしてさらにインゴルシュタットに留まって人間を創造することに取りかかる。しかし複雑な繊維、筋肉、血管などの部分を作るのは余りに細かな仕事であり、かなり長い時間を要するであろうから、巨大な体、つまり8フィートの背丈とそれに見合う部分を創ろうと計画する。こうして材料集め、長い間の労苦と疲労が始まり、2年後についに完成を見る。しかし、美しい人間を創るつもりであったが、手違いによって、それは見るも恐ろしい怪物であった。その怪物が生命を受けたときの様子は次のように描写されている。——「黄色い皮膚はその下の筋肉や大動脈の動きをほとんど覆ってはいず、髪は漆黒で後ろになびき、歯は真珠のように白かった。しかしこうした豊穡さはもっと潤んだ目と恐ろしい対照をなし、その目がはめこまれた茶色がかった眼窩と、皺だらけの顔と、一直線の黒い唇とはほとんど同じ色」だった——あまりのおぞましい姿に耐えられ

ず、寝室にもどって気を落ち着かせて眠ろうとするが悪夢に襲われる——「エリザベスがインゴルシュタットの街を歩いていた。驚きながらも大喜びで彼女の唇に口付けすると、その唇は死人のように鉛色で、容貌がすっかり変わっていた。彼は亡き母の死体を抱いているような気がした。経かたびらが彼女を包み、そのフランネルのひだに墓のウジ虫が這っているのが見えた」(iv)——この夢はエリザベスの死を不吉に予示するものである。

こうしてフランケンシュタインは戸外で一夜を明かす。そこにクラーク・ヴァルがやってきて、父から留学の許しをえ、ヴィクターと一緒に勉強できることを喜びあう。翌朝自分のアパートにかえってみると、怪物は窓辺で歯をむきだして笑いながら去っていく。その後ヴィクターはしばらく病床に就き、理由の分からないクラーク・ヴァルは戸惑うが、ヴィクターは決して訳を語ろうとしない。

いよいよ故郷に帰ることになり、父からの帰る日取りを決めた手紙を待っていると、父がウィリアムが殺されたという知らせが届く。ヴィクターは早速家に帰ることにし、懐かしい故郷の美しい山々や湖を通り抜けていくとき、樹木のあいだに怪物の姿を認め、あいつが弟を殺したのだと確信する。帰宅すると、ジャスティンが犯人だと聞かされる。ヴィクターはもとより彼女が犯人ではないことを知っているが、自分が怪物を創りだしたことは到底信じてもらえないと思い、沈黙を守る。エリザベスも彼女の無罪を信じるが、ウィリアムが身につけていた、母の肖像の入ったロケットが彼女の服から発見され、それが有罪の決め手になる。ヴィクターとエリザベスが刑務所に面会にいくが、ジャスティンの無罪を証明することが出来ず、裁判の結果、彼女は絞首刑台の露と消える。

(Vol.II) フランケンシュタインが怪物と出会い、怪物が創造されてから現在に至るまでの、彼自身が語る経過である。

彼は目を開き、様々な目に映るものを識別し、空腹や喉の渇きを満たすこと、夜と昼の区別をすること、火を使うことなど、次第に人間界の知識を得ていく。彼はいわば幼児体験を経て、原始的な生活から文明のなかに入るのである。

彼はなんとか人間の役に立ちたいと思い、また、人間と親しい友好関係を結びたいと願う。しかしその醜い、恐ろしい姿のために人間は露骨に恐怖と憎し

みを示し、急いで逃げ去るか攻撃を加えるかである。あるドイツの村でのこと、彼が小屋のなかに身を隠していると、となりのコテージの住人たちが見える。それは盲目の老人、Felix と Agatha 兄妹、そして途中からフェリックスの恋人 Safie が加わる。もともとこの一家はパリの名家であったが、あるトルコの商人が政府に有害だとして裁判を受け、死刑を宣告される。その裁判は不当なものであり、フェリックスは商人を牢から救い出す報酬としてサフィと結婚させること、財産の一部分を彼に与えることを約束する。こうして商人は処刑の前日、フェリックスの手によって脱獄するが、彼は約束を守ろうとしない。サフィは父のもとを離れ、恋人フェリックスのもとにやってきたのである。怪物はこうした彼らの生活を垣間見て深く同情し、人知れず薪を運んだり、畑の手伝いをしたりする。父親のド・レイシーは盲目であるがギターを弾き、息子と娘はそれに合わせて歌を歌い、貧しく不幸ではあるが、実に温かい家庭である。フェリックスはサフィに言葉や文字を教え、怪物はその様子を覗きながら、彼も言葉と文字を覚えていく。こうしてこの一家に好意を持った怪物は親しく彼らと交わりたいと思う。ある日、怪物は老人がひとりでいるところを見計らい、そのそばに近づいて自分の境遇を嘆き、人間に親切にしてもらいたいと訴え、老人に慰められ勇気づけられる。そこにフェリックスとアガサとサフィが戻ってくると、アガサは失神しフェリックスは彼に襲いかかる。翌日、ふたたび友好を結ぶことを期待しながらコテージを訪れた怪物は、コテージが無人であることを知って、失望と怒りのためにコテージを焼き払う。

怪物はヴィクターに「自分にも女性の相棒を創ってほしい」と要望する。それが創り出されたなら、ふたりで南アメリカの、だれも住まない土地に行って、2度と人間の前には姿を現わさないから、と。ヴィクターは怪物の言うことにも一理あると考え、承諾する。

(Vol.III) 父親はヴィクターがエリザベスと結婚してくれることを切に望んでいるが、父に2年間の猶予を与えてくれることを願う。表向きは保養であるが、先にイングランドに来ていたクラヴァルと合流し、ヴィクターはこの期間に女性の怪物を創り出す計画を立て、イギリスの自然哲学者たちに教えを請

い、材料を集める。たまたまスコットランドに住む知人から遊びに来るよう  
との招待を受け、クラークと共に旅に出かける。途中、ケンブリッジや湖  
水地方などをはじめとしてさまざまな土地を訪れながらスコットランドに到着  
するが、ヴィクターはクラークと別れ、怪物との約束を果たすべくオーク  
ランド諸島の小島にこもり、もうひとりの女性怪物を創ることにとりかかる。  
しかしヴィクターは、この女性怪物がどのような性質をもつようになるのか、  
また、人間に危害を加えるのではないかと考えて創りかけた体を壊す。その  
とき怪物が現れて違約をなじり、「おまえの結婚式の晩、おれはおまえの前に姿  
を現すぞ」と言い残して立ち去る。ヴィクターは破壊した女性怪物をバッグに  
詰め、海に投げ捨てる。そのとき嵐に遭って船は流され、彼はアイルランドの  
寒村に流される。怪物はクラークを締め殺し、その死体を同じ寒村に運ぶ。  
そのためヴィクターはクラーク殺しの嫌疑を被って裁判にかけられるこに  
なり、3カ月のあいだ拘留され、ようやく嫌疑が晴れて父親が迎えに来る。

フランケンシュタインがクラークを殺されたショックからようやく立ち  
直ったとき、エリザベスとの結婚式を挙げることになる。結婚式が終わると、  
フランケンシュタインはピストルと短剣を携え、怪物の襲撃に備える。湖の船旅  
で新婚旅行に出かけ、宿に着くと怪物が現れてエリザベスを締め殺す。そして、  
自分は北極の地の果てに行くから、追ってこれるものなら追ってこい、と言  
い残す。ヴィクターはあくまで怪物を追い、かれと生死を賭けた戦いを挑もうと  
する。怪物は逃げる途中見え隠れしながら、フランケンシュタインを哀れむよ  
うに、あざけ笑うように、いろいろな印を残したり伝言を石に刻んだりして、  
北極に向かって行く。[怪物がこうして逃げる途中が、最初にウォルトンが怪物  
の姿を見たときなのである]。

#### ウォルトンの追記

フランケンシュタインは意識を取り戻したり昏睡状態に陥ったりしながら、  
氷海に閉ざされた船のなかで横たわっている。船員たちは、このままだと船が  
危険で、自分たちの命も危ないと考えて反乱を起こし、イギリスに帰ろうとす  
る。フランケンシュタインは船員たちを叱りつけ、この探検をそんなに簡単に



中止してよいのか、勇気を奮い起こして後世の人間に恩人としてもてはやされることこそ名誉ではないのか、と説く。しかしウォルトンは帰国を決意する。ヴィクターはあくまで怪物を追う意志を表示するが、もはやベッドから起き上がることができず、ウォルトンに怪物を滅ぼすことも頼めずに息絶える。

ウォルトンが棺を安置した部屋に入ると、怪物の姿を見つける。彼は言う——もうフランケンシュタインが死んだのだから、これ以上人を殺すことはしない。おれは自分がやったことで自分を責めている。本当は、おれは人を愛し人に同情するように出来ているのだ。フランケンシュタインを哀れみ、自分を嫌悪した。おれはもう悪行を働こうとは思わない。この船を離れて北の外れに行き、死ぬことにする。おれを創ったフランケンシュタインが死んだのだから、おれが死ねば一切の苦しみもなくなるのだ。おれは火葬の薪に上がって、身を焼きながら死んでいこう——と。こうして怪物は犬ソリに飛び乗って、暗闇の中に消えていく。

### (3) 物語の考察

この作品で考察すべき問題は多岐に渡る。

まず最初に、登場人物たちが互いに分身関係、言い換えれば2元性(duality)を持っていることがひとつの特徴をなしている。例えばウォルトンは導入部で、世界の人類未踏の地域を極め、北極の国々に到る航路を発見し北極の磁気の謎を解明することは、人類にとって計り知れない利益をもたらすだろうと述べてはいるが、結局は「富を手に入れるより栄光 (glory) を手にしたい」と名誉を求めている。彼は年少のころから航海記を読みふけり、航海に不可欠の医学、数学、自然科学を独学で身に付けたが、15歳の生徒ほどにも教養がないことを意識している。一方、フランケンシュタインは13歳で Cornelius Agrippa [(1486–1535) ドイツの神秘主義的哲学者。魔術論『隠秘哲学について』の著書がある]の著述を読み耽けり、真剣に錬金術を究めようとして、「富を求めることは劣った目的であり、人間の体から病気を駆逐し、人間を非業の死を受け

る以外は不死身にすることができれば、その発見はどのような栄光 (glory) をもたらすことか」と不老不死の霊薬 (elixir) を作ることを夢見るが、しかしやがてその関心は薄れ、自然哲学に目を向けるようになる。最終章 (III, vii) でフランケンシュタインがウオルトンに向かって、「さようなら、ウオルトン、平穩のなかに幸せを求め、例え科学と発見に名を挙げたいという明らかに罪のない野心であつても持たぬことだ」と言い残すのは、自分の生涯を顧みて分身としてのウオルトンに対する警告である。

さらにウオルトンは自分に心を許せる友人がいなかったことを嘆き、「わたしは友人がたまらなく欲しかった。わたしに共感し、わたしを愛してくれるひとを求めてきた」と言っている。そしてフランケンシュタインのなかに教養豊かで知性的な友人を見出し、希望が達せられたことを喜ぶ。この望みは怪物がフランケンシュタインに女性の同伴者を創ってほしいと頼み、「おまえはおれのために、おれの存在に必要な、共感を交わしながら生きていくことができる女性を創らなければならない」(II, ix)と言っているのと照応する。つまり、ウオルトンは怪物の願望と心情を分かち持っているのであるが、このことはフランケンシュタインと怪物との2元性を考えるとき、容易に肯定できることである。

クラークは心の優しい、友情に厚い青年で、常にフランケンシュタインを慰め、元気づけている。彼は实际的な商人の父親に似ずロマンチックで想像力に富み、「彼の想像力はあまりにも生き生きとしていて、科学の細部に対する考察には向いていない。言語が彼の主要な研究対象であり・・・すでにギリシャ語、アラビア語、ヘブライ語が彼の関心を占めていた。」(I, v) 一方、「彼の会話は想像力に満ちていた。そして、ペルシャやアラビアの作家たちをまねて、すばらしい空想と情熱に満ちた物語を考え出すことが始終あった。また、ときにはわたしの大好きな詩を繰り返したり、わたしを議論に引き込んだりすることがあり、しかもその議論を非常に巧みに立証した。」(I, v) フランケンシュタインは「彼は自然の詩情のなかで形成された存在だった」(III, i)と述べている。こうしたクラークのなかにはシェリやバイロンの面影を認めることができる。また、フランケンシュタインは「・・・わたしはクラークのなかで自分

の以前の面影を見た。彼は詮索好きで、経験と知識を獲得することをしきりに望んでいた。彼が観察した風俗の違いは彼にとって知識と楽しみの、尽きることのない源泉だった」と述べている。クラークヴァルもまたフランケンシュタインの分身なのである。そしてメラーが「クラークヴァルは、初版では、それに照らしてヴィクターの墮落の程度を計る、道徳的美徳の基準の役目をした」と述べているのは正しいであろう<sup>(7)</sup>。

さらにジャスティンとフランケンシュタイン夫人、ヴィクターとエリザベスのあいだにも2元性を認めることができよう。しかし、ここではさらに重要と思われる、怪物とヴィクターの関係に考察を進めたい。怪物はII, vで、フェリックスがサフィを教育するために使ったテキストはVolneyの*Ruins of Empires* だったと述べている。[ヴォルネー(1757-1820)はフランスの著述家・探検家で、主著は*Les Ruines, ou Meditations sur les revolutions des empires* (1791)『滅亡、あるいは主権の推移に関する考察』である。]彼は「おれはこの書物によって歴史の知識を得、世界に現存するいくつかの帝国の考え方を知った」と語り、さまざまな国の風習、政治、宗教の違いに見識を持つようになった。さらにviiでは、森のなかで皮の旅行カバンを拾い、そのなかにフランス語で書かれた『失樂園』、『プルターク英雄傳』、『若きウエルテルの悩み』を発見し、(生を受けてから1~2年のあいだにこれほどの教養と知識を得ることはあまりにも非現実的ではあるが) それを読み耽ったことが記されている。

怪物は『失樂園』を本当の物語として読み、「万能の神がみずから創りだしたものと争う姿が興奮をもたらすことができることは、あらゆる驚きと畏怖の念を引き起こした……そのいくつかの状況が自分に似ていると思われたので、それを自分の状況に照らし合わせた。アダムのように、おれは存在する他のいかなる人間ともなんお結びつきもなく創り出されたことは明らかだが、アダムの状況は他のすべての点でまったくおれの状況とは違っていた。彼は神の手によって完全な創造物として生み出され、創造主の特別な配慮によって保護され、幸せに繁栄している。自分より優れた性質を持つ存在と話したり、それらから知識を得たりすることを許された。しかしおれはみじめで頼るものも

なく、孤独だ。いくどもサタンこそおれの状態にいつそうふさわしい表象だと考えた。というのは、サタンのように、おれの保護者たち(i.e. ドレイシイ家の人びと)の幸せを目にすると、しばしば癪に障るほど妬ましかったからだ」(II, vii) と述べている。彼は自分がこのように人間に忌み嫌われ嫌悪され、しかも自分を創造したフランケンシュタインからも憎悪されることによって、孤独感にさいなまれる。それがフランケンシュタインに対する復讐心を呼び覚ましたのである。彼が自分にアダムに対するイヴのような女性の怪物を創ってほしいと頼むのは、ドレイシイ家でのフェリックスとサフィとの愛情を垣間見たからであり、また『若きウエルテルの悩み』を読んで「それが述べている穏やかな、家庭的な様子が気高い情緒と感情に結びついて、その目的が私利のためではなく、おれの保護者たちのあいだでおれが経験したことに一致していた」(II, vii) ために、愛しあう者同士の関係を理解したからである。

フランケンシュタインは「わたしは熱狂的な狂気に駆られて理性的な創造物を生み出した。そしてそれに出来る限りの幸せと安泰を与える責任があったが・・・他の人びとの幸せと不幸に多いに関係があるために、そのことに注意を向ける義務があった」(III, vii) とウオルトンに述べている。

*Frankenstein, Or modern Prometheus* の題辞は

Did I request thee, Maker, from my clay

To mould me man? Did I solicit thee

From darkness to promote me? —

(大意) 創造主よ、わたしは自分の土塊(つちくれ)から人間に創ってほしいとお願いしたでしょうか。暗闇からわたしを高みに上げてほしいと懇請したでしょうか。

であるが、これはミルトンの『失樂園』のなかで、樂園から追放されることに決まったアダムの独白(Book X, ll.743-46)の一部である。怪物はフランケンシュタインに向かって「フランケンシュタイン、他のすべての人間に公平にして、おれだけを踏みにじるな。おれにはおまえの公平さ、寛大さや愛情さえも、当然与えられてしかるべきなのだ。忘れるな、おれはおまえの創造物なのだ。

当然おまえのアダムであるべきなのに、おれは墮天使で、なにも非行を働かないのに、おまえは喜びから追い出すのだ。どこにも無上の至福があるのに、おれだけが締め出されて、取り返せないのだ。おれは慈悲深く、善良だった。不幸がおれを悪魔にした。幸せにしてくれ。そうすれば高潔になってみせるから」(II, ii) と言う。このように、自分は元来優しく、親切で、人間のために尽くしたいという気持ちを持っているのだが、人間たちが自分の醜い、恐ろしい容貌のために毛嫌いし恐れて、自分を理解しようとしないうえ、だからおれはおまえに復讐するのだ、と彼は繰り返して述べている。『失樂園』からの題辞は、まさしく怪物の境遇と心情をよく表わしている。

*Frankenstein Or, The Modern Prometheus* というタイトルが示すように、フランケンシュタインはプロメシユースに擬せられている。プロメシユースはギリシヤ神話における巨人神族 (Titans) のひとりで、火を盗んで人類に与えたために宇宙を支配する最高神の Zeus (ローマでは Jupiter、または Jove) によって Caucasus (東ヨーロッパにある山脈) の岩山に鎖で繋がれる。そして驚によって肝臓をついばまれるが、不死身であるために、すぐさま肝臓は元どおりになり、限りない肉体的苦痛を味わう。ギリシヤのアイスキュロス (Aeschylus) (525-456 B.C.) の『縛られたプロメーテウス』という悲劇<sup>(8)</sup> では、彼が繋がれるにいたった経緯を述べている。ゼウスはタイタン族を根絶やしにしたが、プロメーテウスだけはゼウスの秘密を知っているので生き残る。その秘密とは、ゼウスが女神 Thesis との結婚を望んでいるが、テイシスから生まれた子供はゼウス以上の力を持ち、ゼウスの位置を奪うことになっている、というものである。プロメーテウスという名前は「前もって知恵を働かせる者」の意味である。彼はその秘密を武器に、人間を創り出し、死を予測できない人間に盲目の希望を植えつけて火を授け、いましめを解かなければ、その秘密を明かさないと主張する。火を与えることは文明を与えることであり、様々な技術と人間の病を癒す薬を与えることであり、文字を与えることである。こうした経緯が数人の登場人物の口から明らかになる。しかし、アイスキュロスの悲劇はこの言わば第1部で終わり、第2部の『鎖を解かれたプロメーテウス』と第3

部の『火をもたらした者』は散逸して、今は残っていない。

『フランケンシュタイン』にはプロメシュースの名は一度も言及されていない。シェリにはアイスキュロスの『プロメーテウス』の翻訳があり、のちに彼が *Prometheus Unbound* という劇詩を書いたとき、この作品から想を得たものであることは知られている。これは 1818-19 年に執筆され 1820 年に出版されたものであるから、『フランケンシュタイン』執筆のときにはまだ書かれていなかった。一方、バイロンには "Prometheus"<sup>(9)</sup> という 3 連からなる短い詩があって、これは 1816 年に発表されているから、メアリは当然その詩を読んでいたはずである。こうした神話はロマン派の詩人にとって打って付けの題材であった。このバイロンの『プロメシュース』の第 2 連の最初の 11 行は

TITAN! to thee the strife was given  
Between the suffering and the will,  
Which torture where they cannot kill;  
And the inexorable Heaven,  
And the deaf tyranny of Fate,  
The ruling principle of Hate  
Which for its pleasure doth create  
The things it may annihilate,  
Refused thee to even the boon to die:  
The wretched gift eternity  
Was thine — and thou hast borne it well.

(大意) タイタンよ！ おまえは苦しみと意志があい争う運命だったのだ。それらが殺すことが出来ないときは、身をさいなむ責め苦を与えるのだ。仮借のない天と、耳を貸そうとしない運命の暴虐と、消滅させるかもしれないものを喜びのために創り出す憎しみを支配する根源は、おまえに死ぬ恵みさえ与えようとはしなかった。みじめな贈り物である永遠はおまえのものだった — おまえはそれによく耐えた。

とあり、また第 3 連の 11.13-18 には

Like thee, Man is in part divine,  
A troubled stream from a pure source;  
And Man in portions can foresee  
His own funereal destiny;  
His wretchedness, and his resistance,  
And his sad unallied existence:

(大意) おまえのように人間は一部分神聖だ、澄んだ源泉から流れ出る騒がしい小川だ、そして人間は自分がいかなる死にざまをするか、ある程度予測できる。惨めさ、抵抗、哀れな孤独の存在を。

とある。プロメシユースの苦しみと意志の戦い、激しい責め苦を受ける苦しみ、天が与えた運命と激しい嫌悪の情にさいなまれつつも死ぬことさえ出来ない身に、メアリはフランケンシュタインのイメージを見たと思われるが、一方、シェリの翻訳から彼女はプロメシユースの強烈な自我意識を見たのではなかろうか。自我意識もまたロマン派詩人たちが確立しようとするものである。アイスキュロスのプロメテウスは

だがおれは、ゼウスなどまったく気にもかけていない。

やりたければやるがよい、わずかの間だ、あいつの好きなように  
権力を揮わせておけ。神々の支配者でいられるのもそう長くはな

いのだ。<sup>(10)</sup>

と言っているが、フランケンシュタインと怪物は主客転倒している。怪物が女性の同伴者を創ることを彼に求めながら、「おまえはおれの創造者だ。だが、おれはおまえの主人だ——言うことを聞け」(III, iii) と命令するとき、フランケンシュタインは自我を喪失した。彼は「全能を望んだ大天使のように、わたしは永遠の地獄に繋がれているのだ」(III, vii) とウォルトンに言う。彼は怪物を創り出すことによって万能の神の領域を侵したために、罰を受けなければならなかった。彼は「さようなら、ウォルトン！ 平穏に幸せを求めて欲しい。たとえ科学と発見に名を挙げようとする、明らかに罪のない野心であっても、野心を捨てたまえ」と言い残して息絶える。彼は怪物と同じようにサタンであ

り、また、自我を喪失したプロメシースなのである。H. ブルームは「フランケンシュタインの悲劇はプロメシースのように過度によるものではなく、彼自身の道徳的失敗、つまり愛することができなかったことによる」と述べている<sup>(10)</sup>。

しかし、彼と怪物とは2元性を持っている。フランケンシュタインはあまりに情緒的 (emotional) であり、怪物は理性的 (rational) であって [「わたしは熱狂のあまりに狂気になり、理性的な創造物を創り出した」 (III, vii)]、ふたりは heart と head を表象し、二者がひとつとなって完全な一体を成すという意味において dual である。冒頭でウォルトンは、「北極は氷に閉ざされた、荒涼とした土地ではなく、ぼくの想像ではいつも美しい、喜びに溢れた地域と映る…そこでは太陽はいつまでも見えて、大きな円盤は水平線の縁をかすめ、いつまでも光彩にあふれている」と記しているが、これはこの世の天国の姿ではないだろうか。フランケンシュタインも怪物もこのような北極に消えていくことは、死後に救済されることを暗示するものであろう。

## 注

- (1) Cf. Preface to *Frankenstein*, Mary Shelley, ed. J. Paul Hunter (Norton Critical Edition, 1996) p.x & William A. Walling, *Mary Shelley* (Twayne Publishers, Inc., 1992) p.27
- (2) Michael R. Steinberg, "Thematic and Structural Analysis" in *Mary Shelley's Frankenstein, Bloom's Notes*, ed. Harold Bloom (Chelsea House Publishers, 1996) p.11
- (3) M. K. Joseph, "The Composition of Frankenstein" in *Frankenstein, Mary Shelley*, p.157 & p.158
- (4) Quoted by M. K. Joseph, p.159
- (5) Anne K. Mellor, "Choosing a Text of *Frankenstein* to Teach" in *Frankenstein, Mary Shelley*, p.161